

貧困が招く児童虐待の現状

(ペルーにおける児童虐待の現状)

福 井 千 鶴

Present condition of cruelty for children by poverty
(Cruelty for children by poverty at Peru)

Fukui Chizu

Child abuse is an issue in many countries. The circumstances of vulnerable children who suffer abuse varies, for example, violent parents, increase in number of orphans due to family breakup, child labor and begging on the streets due to poverty, etc. This paper summarizes the results of interview surveys in Peru which were conducted in order to grasp the actual situation of child abuse.

Surveys were conducted as follows: the developing situation of a deprived settlement of Pachacutec which is emerging in the Ventanilla area in the suburb of Lima; the child abuse situation at Ventanilla police station; the current situation regarding urbanization of the deprived area by Ventanilla City Planning Office; the current situation of the Emmanuel Home orphanage in the deprived area of Ventanilla and the future hopes of the children who are placed at the orphanage.

1、はじめに

多くの国で児童虐待が問題視されている。親の暴力や家族の崩壊あるいは貧困が原因で家庭を離れ孤児やストリートチルドレンになる子供達の増大、学校で教育を受けられず児童労働や街頭に立ち物乞いをしなければならないなど、弱者の児童が虐待を受ける様相は多様である。本稿は児童虐待の実態を把握するためペルー国リマ市郊外の貧困部落から都市化が進行中のベンタニージャ地区で拡大が進む貧困部落パチャクテック地域の部落形成状況、ベンタニージャ地区警察署で児童虐待の状況とベンタニージャ都市計画局における拡大する貧困部落と都市化の現況の聞き取り調査およびベンタニージャ地区貧困部落内にあるエンマヌエル児童施設における収容児童の現況と児童の将

来の希望について聞き取り調査を行った結果をもとに児童虐待の現況についてとりまとめたものである。また、児童施設に収容された児童の聞き取り調査より、1) 家族崩壊にいたる状況、2) 家族と児童の絆、3) 家族における児童虐待の様相、4) 児童の将来展望、5) 児童の自立状況、などについて明らかにしようとするものである。

II、貧困部落の様相

児童虐待の発生要因を解明するため貧困層部落とその生活状況について考察する。

2. 1 貧困の概念について

貧困とは、1) 所得面から分別すると普通の生活をするに必要な所得がない。国際機関等では1日1ドルを貧困の基準（貧困ライン）として、それ以下の所得で生活する者を貧困層として扱っている。また、国別の貧困基準を設けている国もある。2) 生活の剥奪状況から、貧困層としている場合がある。すなわち、電気や水がない、家がない、下水道がないなど生活をするに必要な最低限のインフラ提供を受けられていない、あるいはインフラ整備が行き届いていないなど、の状況にある家族や人々をいうことができる。

ペルーの貧困人口は、2002年において1日1ドル以下の貧困人口割合が18.1%¹⁾、ペルー国の貧困ライン以下の人口割合が54.3%²⁾と極めて貧困層人口が多い。都市部と農村部を比較すると都市部の36.9%、農村部の74.3%が貧困層で、極貧層は都市部6.0%、農村部42.4%で極めて農村部の貧困が多い状況にある³⁾。ここに示すように農村部は極めて貧しく都市に職と収入を求めて多くの人々が集まってくるようになり、都市への人口集中が1920年代に始まり現在でも続いている。ペルーの地勢では海岸地域、山岳地域、森林地域と大きく3つ分けることができ、図表-1に1940年を100とした3地域で最も大きい都市の人口増加状況を表す。海岸地域についてはリマの状況を明確に把握するため、最も大きいリマ市に次ぐピウラも含めた。この図表から明らかなようにリマ市への人口集中は大変激しい状況にあり人口の大都市への一極集中化が著しく起こっていることが分かる。この都市部の著しい人口増加は農村部に貧困層が多いことが原因で、都市に生活の糧を求めて集まることが要因といえる。

2. 2 貧困部落の形成の様相

1) 貧困部落の形成について

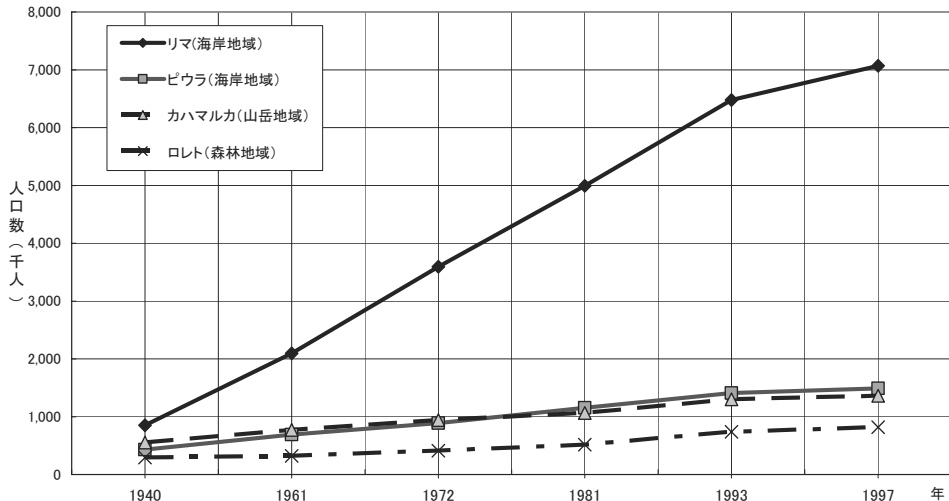
リマ市への著しい人口集中により、リマ市の移入者受け入れが整わず、移入者はリマ市周辺の政

1) 横田洋三監修『国連開発計画 人間開発報告書・2004』国際協力出版会、2004、P-189

2) INEI『ANUARIO ESTADISTICO PERÚ EN NÚMEROS 2003』Cuanto、2003、P-550

3) 同上書、P-543

図表一 人口増加状況



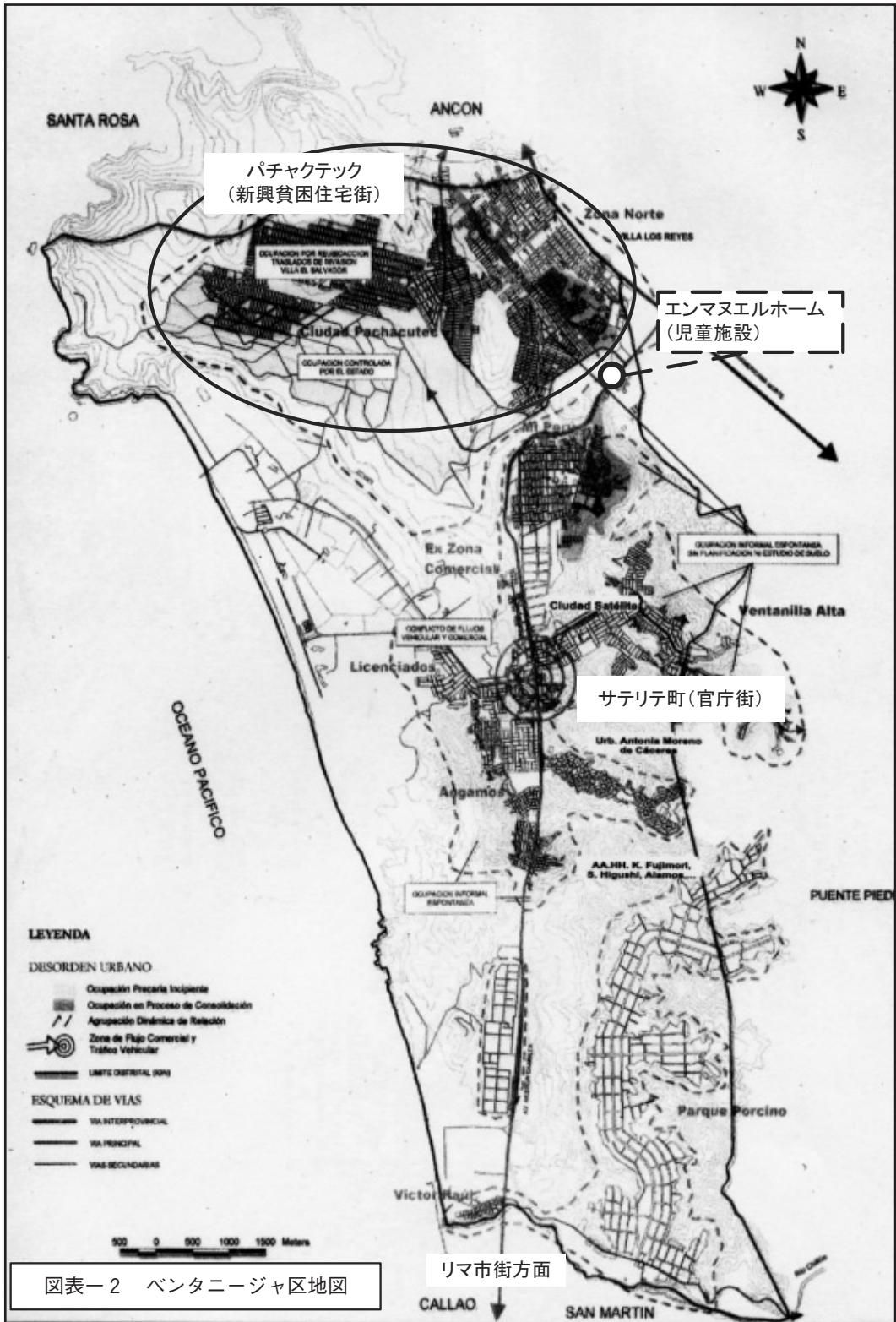
出所：INEI『Peru'97 ANUARIO ESTADISTICO』CUANT S.A, 1997, pp201-203より筆者編集

府や地方自治体が所有する公的地を不法に占拠し貧しい住居を作り住み着き、貧困部落を形成してゆく。都市部には1)住居、2)職、3)経済的支援体制、4)社会的・経済的に合法的に取り扱う制度、などが整っておらず、しかも都市部の住民は移入者の流入に反対の態度をとっていた。このため、都市部に移住した住民は、都市部の合法的な枠組みの中における、1)住居の確保、2)生計を立てるための経済的な手段の確保、3)法律の庇護の下での生活を確保することが困難で、必然的に非合法住民にならざるを得なかった。

1997年の農村部貧困人口割合は64.8%、うち極貧困層は31.9%、リマ首都圏では35.5%、2.4%で農村部の貧困層および極貧層の割合が極めて多い⁴⁾。例えば、アンデス山岳地帯では耕作限界地に生活するが故に、生計を維持するための経済的な手段が極めて乏しく、貧農の状態に置かれている。このような住民が都市部に移住しても都市部の移入者の受け入れに対して前述したごとく生活支援体制がなく経済的な手段の確保が極めて難しく、移住以前と同じ貧困の生活環境に置かれることになる。このような状況にもかかわらず、依然として都市部への移入者は減ることがなく現在でも続いている。この要因は都市部において、1)経済確保の手段が農村部に比べ多種多様で生計を確保する機会に遭遇する機会が多い、2)農村部と都市部の賃金格差で都市部が高い、の2点といえる。

農村部より都市部へ移入し、不法占拠した土地に極めて貧しい小屋を作り住み着くのであるが、その土地には水も電気もなく広大な土漠の丘陵地帯にアメーバのように張り付き、貧困者の群れが溢れるようになる。新しい不法占拠地には親類縁者や地方の同郷の者が集団を成し住み着きそれを核として貧困部落が拡大して行くといわれている。住宅は最初に柱を4本買い、周りを囲むエステラという筵を買いそれを組むことにより移入者の最初の簡単な住宅が出来上がる。

4) INEI『ANUARIO ESTADISTICO PERÚ EN NÚMEROS 2003』Cuanto, 2003, P-525



図表-2 ベンタニージャ区地図

2) 新しい貧困部落パチャクテックの様相

リマ周辺部には多くの貧困部落（Asentamientos Humnos：アセンタミエントス ウマノスと呼ばれる）がある。中でもここで扱うベンタニージャ（Ventanilla）区はリマ市から北東部34キロメートル地点から北部に位置し約7,500エーカー、2000年約25万人推定（1993年約9万5千人）が居住する。ベンタニージャの最北部にパチャクテック（Ciudad Pachacutec）部落が存在する（図表－2参照）。ベンタニージャ区は1969年に設立され、当時から貧困部落として拡大発展してきた⁵⁾。近年、パチャクテックに不法占拠者が多数住み着くようになり貧困部落が著しい拡大を見せている。この地域は写真－1に示すように広大な丘陵地にあり移入者の入居拡大が著しく進んでいる。



写真－1 パチャクテック貧困部落の景観

ベンタニージャ区では2010年までの開発計画が作られ都市基盤の整備が進められている。この計画の中には住民生活に必要な電気や水の供給、都市機能の充実、学校の建設などインフラストラクチャーの整備が上げられている。しかし、開発に必要な資金の調達が無潤沢ではなく計画倒れになっているプロジェクトが多い。パチャクテック部落の電気の例にすれば、旧アラン・ガルシア時代の整備、フジモリ大統領時代の整備計画で電気を供給するための電柱を建てたり電気の線を引くようにプロジェクトが進められたが大統領が変わるごとに整備地区が異なり前大統領のプロジェクトが引き継がれ完成させることがなく放置され、終局的には完成されないまま放置されている。途中まで配線工事がされた地域では電線や電柱が盗まれ計画が完了できない状態で放置されている景観が散見される。

3) 貧困部落の子供達と教育

都市化が進んでいないパチャクテックのような新しい貧困部落では、学校施設が行き届かない、生活に必要な収入が確保できないなどの理由で学校に通う子供達は極めて少ない状況にある。子ども達の多くは家族の経済を支えるために働きに出るのであるが、新興部落ではほとんどの場合収入

5) Dr.VICTOR MANUEL PORTILLA F. 『PLAN ESTRATEGICO DE DESAROLLO VENTANILLA AL 2010』 MUNICIPALIDAD DISTRITAL DE VENTANILLA, P—28

を得る道がない状況にある。このような経済状況の中で地域内では多くの犯罪が発生している。窃盗が多いと言われている。適正な教育が受けられなかったり多くの子供達が犠牲になっていることが多い。パチャクテックではある神父さん達により写真-2に示すディビノニーニョ (DIVINO NIÑO) と名付けた手作りの礼拝堂が作られ、毎月定期的に子供達を集め、食事を振舞ったり教育を支援したりする活動が行われている。

神父さんの説明では、学校の整備やインフラの整備は地方自治体や役所では実行までに相当の時間が掛かり進まないで、貧困部落の生活支援では神父さんたちが先行してプログラムを進め、ある程度の形ができると役所が出てきて整備に着手するといっておられた。

地方から貧困部落に移入した住民は、前述したごとくこの地で収入を得ることは大変困難であるために経済的に苦境に立たされる場合が多く、家族の崩壊、暴力や父親が行方不明になったりすることにより子供が親から離れて生活する、いわゆる孤児になったり、ストリートチルドレンになる事例が多い。また、貧困部落では生活を支えるために教育を受ける機会に恵まれず労働に従事させられるなど、児童が虐待を受ける機会が非常に多いといえ、多くの問題が発生していると推測される。



写真-2 パチャクテックの礼拝堂と神父

III、ベンタニージャ地区における幼児と成長期の子供の問題

ベンタニージャ区は、主要居住地が不法占拠による貧困層の定着から始まり長い期間を経て都市化が進んだ、例えばCiudad Satelite (サテリテ町) 地域と現在も移入者が著しく拡大している新興地域のパチャクテック部落など混在しながら貧困層を多く抱えた居住区域が拡大している。この区では、貧困層に依拠した居住地の成り立ちから多くの住民問題を抱えている。幼児や成長期にある子供たちの問題も多く存在する。この章では、ベンタニージャ地区の問題と子供問題の解決に取り組む組織と活動状況について検証する。

3. 1 登録された問題点と処理について

2005年度にDEMUNA（La Defensoria Municipal del Niño y el Adolescente：幼児および成長期児童の監視局）に届出があった幼時と成長時期の児童問題について、図表－3に示す。虐待については133件（月約10件）と比較的多く、親子関係の相談で188件、家庭暴力25件となっている。食物の補給が1,702件と極めて多い。

DEMUNAは地方自治体や都市におかれ、幼児と児童に対する支援、保護および普及活動のために組織化されている。ベンタニージャ区役所とパチャクテック地域のKusi Warma協会と幼児と成長期の児童に対する虐待、過度のいじめおよび食料の補給に関わるDEMUNAの活動について2004年4月26日合意した。この合意によりパチャクテック地域までDEMUNAの活動が拡大された。

図表－3 2005年DEMUNA届出・処理件数

番号	内容	件数
1	親子関係問題	188
2	家庭内暴力	25
3	児童虐待	133
4	指導	254
5	調停証作成	239
6	仲裁書作成	95
7	食物の寄託	1,702
	合計	2,636

出所：DEMUNA，2005より筆者編集

3. 2 市民安全確保のために

ベンタニージャ区では地域開発として2010年計画が策定され、その計画に従って住民の安全の確保、都市の開発、電気や上下水道などの整備、学校と教育の充実、港湾整備、地区経済の発展と活性化、道路の開発など計画が実行に移され推進されている。しかしながら、区役所の開発責任者に寄ればこの地域の公共事業予算は計画を遂行するに足りる予算がなく開発を円滑に進めることは困難な状況にあり、計画倒れになっているとのことである。

市民安全を確保するための計画も策定されており、安全を脅かす諸問題について分析されている。この計画の中には犯罪、児童問題や弱者のこうむる被害などが上げられている。ベンタニージャ地区のDEMUNAとベンタニージャ警察によると幼児と18才未満の子供たちおよび女性は弱者であり暴力に一番傷つき易い状況に置かれているとして、その保護に注目している。家庭内暴力、経済問題、家族の子供や女性に対する放棄、幼児や児童に対する虐待、性的虐待が問題になっている。18才未満の成長期の子供たちでは若者の売春、同性愛、麻薬、アルコール依存症、望んでいない妊娠、エイズに関する歪められた情報などの問題が提起されている。

この区における問題は大きく分けると次の5つの問題に仕分けされている。

- 1) 家庭内暴力
- 2) 世襲財産に対する犯罪

- 3) 土地の不当な取引
- 4) 横行する暴力
- 5) 集団の悪党グループの存在

幼児問題に関しては幼児虐待に問題が多く発生している。パチャクテックでは家庭内暴力と一般的犯罪が多発している。他の地域では一般犯罪、麻薬、強盗や悪党グループによる犯罪を挙げることができる。これらの多発する地点は多くの場合特定されている。高速道路では悪党の出現と麻薬取引が横行している。これらの問題を解決するために、家庭生活のあり方、家族と絆の関係、親子関係、麻薬問題、エイズ、集団での仕事へのかかわり方などの教育が子供たちや児童に行われている⁶⁾。

DEMUNAに持ち込まれた諸問題は、DEMUNAにおいて調停や仲裁、必要な支援プログラムを提供している。この活動には、地方自治体や地域の安全や健康維持を確保する諸機関、それに地域の弁護士や児童相談人などが連携し協力している。

DEMUNAに持ち込まれた児童に関する問題の多くは児童虐待で、全体の約5% (133件) を占め非常に多い。この地域における児童虐待に関する要因について担当者の話から、1) 家庭内暴力、2) 父親の家出、3) 経済的な破綻、を挙げることができる。家庭内暴力と父親の家出問題は男性の身勝手が起こす問題といえ男性の教育レベルの低さが原因と推測される。経済的な破綻は職がなく収入が得られないことが大きな原因になっている。この3つの要因により家庭崩壊を招いており、弱者である児童が孤児になったり、ストリートチルドレンを余儀なくされるなどの児童虐待を受ける境遇になっているといえる。この3要因はそれぞれが深く関連していて、要因の根底には貧困問題が存在するといえる。この環境から子供を救うには、子供の生活を支援する孤児院や次章で紹介するエンマヌエル・ホームのような児童施設であろう。また、貧困から如何にして脱出させるかも大きな課題といえる。

IV、児童施設の子供たち

孤児になること、家族から離れ施設で生活することは児童虐待の主たる要素の1つといえる。児童虐待の様相を把握するためベンタニージャ地区 (プエンテ・ピエドラ) 貧困地域にあるエンマヌエル・ホーム (養護施設) の児童の境遇や考え方について聞き取り調査した結果を検証する。

4.1 12才以上の子供たちの考え方

1) 教育について

教育の必要性に対する考え方は図表-4に示すように、調査対象者12人が全員必要と答え、学校

6) 前掲書、pp73-74

に行きたいし、大学に入りたいと表明している。12人全員が小学校を卒業している。エンマヌエル・ホームでは生活に対する心構え、学校教育の必要性を説いている。また、大人になってからの自立を支援するための支援を行っている。施設内にあるパン工場やメガネ工場などで手に職をつけるよう指導している。

図表－4 教育について

調査内容	回答内容	回答数
教育	必要	全員
学校	行きたい	全員
大学	行きたい	全員
小学校卒業	卒業	全員

注：聞き取り対象者11歳以上12人

2) 職業について

将来、自分が就きたい職業についてたずねたところ図表－5に示す回答が得られた。その回答は比較的上位の職業に就きたいという希望が現れている。医者、弁護士、会計士、建築家、行政官、教師などで変わったところでは宇宙飛行士を希望するものもいた。

図表－5 将来の職業

内容	回答数
医者	1
教師	4
弁護士	1
技術者	1
建築家	1
宇宙飛行士	1
行政官	1
会計士	1

注：調査対象人数11人

3) ホームに来たことについて

ホームに来たことは大変良かったと思うと全員が答えた。もしホームに来なかったらどのような生活をしていたかという質問に対して、多くの子供たちはストレートチルドレンになっていたと答えた。

ホームにこれなかった子供たちに何かしてあげたいか？ という質問に対しての答えは次の2点があった；

①何か生活の支援をしてあげたい

②ホームに呼んでやりたい

4) 家族の存在について

12才以上の調査対象者11人に対して家族の存在について質問した。

* 質問内容 = 両親または親類縁者がいますか？

* 回答結果 = 8人が有り、3人がないと回答した。ないと回答した者の年齢は15、16、18才であった。

4.2 エンマヌエル・ホームの子供たちについて（聞き取り調査より）

1) ダン君（18才・男）

- ①13才より5年ホームで生活、ホームのパン工場で研修を受けている。
- ②ホームへ来た理由：両親が死亡で経済的問題
- ③家族：両親は死亡（交通事故）
- ④大学：進学したい（大学に入れない場合専門学校に入りたい）
- ⑤教育：必要（仕事を見つけるために必要と考える）
- ⑥ストリートチルドレンについて：仲間に入りたくない。麻薬やシンナーはよくない
- ⑦ホームに収容されないとしたらどうしたか？ おばあさんが面倒を見ることになるが、経済的に成り立たない。ホームにこれてよかった。
- ⑧ホームに来る前学校は：行っていた。

2) 12才の女の子

- ①5才より7年ホームで生活
- ②ホームへ来た理由：両親が離婚で経済的問題
- ③家族：存在、たまにホームに来る。姉と兄が居てホームで生活している。
- ④大学：進学したい
- ⑤教育：必要
- ⑥職業：医者（患者を治すことが好き）
- ⑦ストリートチルドレンについて：仲間に入りたくない。可哀想、支援してあげたい。
- ⑧ホームに収容されないとしたらどうしたか？ おばあさんが面倒を見る（住み込みの女中）、経済的に成り立たない。ホームにこれてよかった。
- ⑨ホームに来る前学校は：行っていた。幼稚園と小学校

3) クラウディア（14才、女の子）

- ①5才で入園、現在14才（6人兄弟）
- ②ホームへ来た理由：両親が離婚で経済的問題および父親の暴力
- ③家族：両親は離婚、家族が複雑（異父母兄弟が多い）
- ④大学：進学したい
- ⑤教育：必要
- ⑥ストリートチルドレンについて：暴力により可哀想
- ⑦ホームに収容されないとしたらどうしたか？ 母の手伝い、経済的に問題。ホームにこれてよかった、家では食べられない問題。

4) シルビア（11才、女の子）

- ①ホームへ来た理由：両親が死亡で経済的問題
- ②家族：両親は死亡（交通事故）

- ③大学：進学したい（大学に入れない場合専門学校に入りたい）
- ④教育：必要（仕事を見つけるために必要と考える）
- ⑤ストリートチルドレンについて：仲間に入りたくない。麻薬やシンナーはよくない
- ⑥ホームに収容されないとしたらどうしたか？ おばあさんが面倒を見ることになるが、経済的に成り立たない。ホームにこれてよかった。
- ⑦ホームに来る前学校は：行っていた

5) 他の子供たちについて

事例を上げた子供たち以外に聞き取り調査より次の諸点による虐待の状況が分かった。また、ホームについての受け止め方が非常によいことが分かった。

- ①ほとんどが家庭問題、例えば離婚や親が死亡などの理由で経済的に問題が原因でホームに収容されている。
- ②中には親が分からない子供たちも居る。
- ③ホームの生活がよいとっている。
- ④家庭内暴力による虐待を受けている。
- ⑤多くの子供たちは長い期間ホームで生活している。



写真－3 エンマヌエル・ホームの子供たち



写真－4 聞き取り調査を受ける子供たち

4.3 エンmanuel・ホームについて

エンmanuel・ホーム（養護施設）では、全寮制で子供を養育している。幼少児から18才まで入園することができる。18才までに自立できるよう教育される。子供たちはホームの寮で寝起きし生活を営んでいるが、学校は寮から近隣の学校へ通学している。

施設は、日系2世のエンmanuel・加藤神父の発案（1981年）でエンmanuel協会が設立され資金集めや建設推進が行われ1989年に完成した。運営は多くの人々、協力者や日本政府、日本財団などの寄進や協力を得て運営されている。

施設にはクリニックやパン工場、レストランが併設されていて地域の貧困住民にサービスを提供している。施設の立地場所は図表-2 ベンタニージャ区の地図に示すようにベンタニージャやプエンテ・ピエドラならびにパチャクテック貧民部落に隣接している貧民街に位置している。施設の目的は貧困層住民に保健医療福祉サービスを提供することが目的で建設されたといえる。施設の土地は当初プエンテ・ピエドラ区のルイス比嘉区長から3,500平方メートル提供され建設が始まった。

ここに収容される子供たちは「全体的に見てこれまでに生きてきた境遇の重荷から精神障害を伴っている」場合が多い、また、「栄養不良の状態やってくる」と同時に反射神経などに機能上の欠陥が見られる子どもが多い」という症状がある。

施設での生活は、年齢と学年別に10～12人を1組として、組毎に何らかの仕事に従事することになっていて毎日何かの仕事に携わることになっている。また、グループには常に保護者と責任者が1～2人つき、朝はシャワーを浴び、部屋を掃除し、朝食をとってから学校へ行く。午後は宿題をやり遊ぶ時間も与えられている。子供たちは集団生活に慣れ、仲間と一緒に明るく快活に生活する環境に慣れ、教育の重要性を認識し、ホームの外の虐待を受けている子供たちと違ったよい環境で生活している。この生活環境が、聞き取り調査にも現れているように、1) 教育を受ける重要性、2) 人を支援する心を持つ、3) ストリートチルドレンとの差をはっきり認識している、4) 人に優しくする人格の形成、など生活に必要な心構えがしっかりと植えつけられているといえ、児童虐待を救う上で必要な施設であり手段といえる。



写真-5 エンmanuel施設入り口ゲート



写真-6 エンmanuel施設パン工場

V. まとめ

児童の虐待は開発途上国、先進国を問わず多種多様の形で発生している。貧困を抱える多くの国では経済的な事情、貧困が原因で家族が崩壊し弱者の子供が虐待を受けている。貧民が多く集まり貧民部落が主体で都市が形成されているペルー国リマ市郊外のベンタニージャ区の実態から、この地域における住民生活における問題は、1) 家庭内暴力、2) 世襲財産に対する犯罪、3) 土地の不当な取引、4) 横行する暴力、5) 集団の悪党グループの存在、の5つが存在することが分かった。この問題の中で、家庭内暴力は往々にして家庭の崩壊を招き、かつ、孤児やストリートチルドレンを生む要因になっていることが明らかとなった。また、貧困が原因で家庭の崩壊を招き孤児や家を離れるなどの子供の虐待を引き起こしている事例が多いことも分かった。

エンマヌエル養護施設の聞き取り調査では、養護施設に入所する主たる要因は家庭の崩壊を上げることができる。例えば、離婚、親の家庭放棄、親の死亡が主たる要因になっているといえる。これらが要因になっているとしても親類縁者の貧困が故に経済的問題でこれらの子供を面倒見ることができず、入所してくる事例が多い。

エンマヌエル・ホームの存在は、今回の聞き取り調査から明らかなように、大変有益で、虐待を受けている子供たちの更正と精神的な支えとして大きな貢献をしていることが分かった。子供たちは教育の重要性を認識し、人を助けるという思いやりの心も生まれ、施設の外に居る恵まれない子供たちへの思いやりの気持ちも芽生えている。

今回の聞き取り調査より、子供が孤児や家を離れる児童虐待の主要因は、1) 家庭内暴力、2) 家庭の崩壊、3) 貧困による経済問題、の3つであることが分かった。また、児童のための養護施設が虐待などから児童を救うための効果的な施設であることも明らかになった。

大変難しい問題ではあるが、1) 貧困におかれている多くの貧困層住民を如何にして貧困から脱出させ、家庭崩壊を防ぐか、2) 虐待を受ける子供を救う児童施設の充実、が今後の児童虐待を防ぐには必須といえる。

（ふくい ちず・本学非常勤講師）

参考文献

- 1) 横田洋三監修『国連開発計画 人間開発報告書・2004』国際協力出版会、2004
- 2) INEI『ANUARIO ESTADISTICO PERÚ EN NÚMEROS 2003』Cuanto、2003
- 3) Dr.VICTOR MANUEL PORTILLA F.『PLAN ESTRATEGICO DE DESAROLLO VENTANILLA AL 2010』MUNICIPALIDAD DISTRITAL DE VENTANILLA
- 4) エンマヌエル協会『Asociación Emmanuel』エンマヌエル協会、2003